

(35) ねぎ・わけねぎ(わけぎ、あさつきを除く)

ア 各病害虫の防除

萎凋病

黒腐菌核病

黒斑病

さび病

小菌核腐敗病

白絹病

葉枯病・黄斑病

べと病

軟腐病

萎縮病

ネギアザミウマ

アブラムシ類

シロイチモジヨトウ

タマネギバエ、タネバエ

トビイロヒョウタンゾウムシ

ネギコガ

ネギハモグリバエ

ネキリムシ類

ネダニ

ア 各病害虫の防除

【留意事項】

(□は総合防除計画に掲載している病害虫)

- ・濡れの悪い作物については、[農薬安全使用に関する参考資料の章の「展着剤の分類とその機能」](#)を参照し、展着剤を加用する。

萎凋病

(耕種的・物理的防除)

- 1 発病ほ場では連作を避ける。
- 2 苗床はネギ連作畑に設けない。
- 3 発病株は早めに抜き取り、処分する。

※石灰を施し、酸度を矯正する。生育中は pH6.5 以上で発病が少ない。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 土壌消毒を行う ([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。
- 2 定植直前に薬剤を処理する。
- 3 発病初期に薬剤を散布する。

黒腐菌核病

(耕種的・物理的防除)

- 1 苗床は無病地を選ぶ。発病ほ場には4～5年間苗床は作らない。
- 2 2～3年間隔で輪作する。
- 3 [共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照する。
- 4 病株は速やかにほ場外で処分する。菌核が形成される前に抜き取る。
- 5 病原菌は酸性土壌でよく生育するため、石灰資材を施して pH7.0 以上に矯正する。

※病原菌の菌糸は低温(5～20℃)で生育する。秋冬ネギでは年明け後に発病が進展することが多い。

※罹病株に形成された菌核が伝染源となる。菌核は土中で数年以上生存するとされている。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 土壌消毒を行う ([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。
- 2 セル成形成育苗トレイまたはペーパーポット苗の場合は、育苗期に薬剤をかん注する。大苗の場合は、定植直前に薬剤に浸漬する。
- 3 土寄せ前に薬剤を処理する。気温が20℃以下に低下する頃(9～10月)に1回目の処理を行う。

黒斑病

(予防に関する措置)

- 1 雨よけ栽培を行う。
- 2 病原菌はネギ、タマネギ、ニンニク、リーキ等ネギ属以外に感染しないので、多発ほ場では、連作を避け、ネギ属以外の作物を輪作する。
- 3 多湿条件下で発生しやすいことから、ほ場の排水を良好に保つ、風通しを良くする。
- 4 発病を助長するため、窒素過多及び肥料切れを避ける。

(判断、防除に関する措置)

- 1 発病株を速やかに除去し、ほ場外で適切に処分する。
- 2 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、発生初期に薬剤散布等を実施する。
- 3 分生子は被害株についてそのまま越冬し、次作の伝染源となるので作物残さを適切に処分する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発病初期から薬剤を10日おきに散布する。

さび病

(予防に関する措置)

- 1 雨よけ栽培を行う。
- 2 発病を促進するため、窒素過多及び肥料切れを避ける。

(判断、防除に関する措置)

- 1 発病株を速やかに除去し、ほ場外で適切に処分する。
- 2 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、発生初期に薬剤散布等を実施する。
- 3 胞子は被害株についてそのまま越冬し、次作の伝染源になるので作物残さを適切に処分する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発病ごく初期から、薬剤を7～10日おきに散布する。

小菌核腐敗病

(耕種的・物理的防除)

- 1 ほ場の排水を良くする。
 - 2 苗の枯死葉を丁寧に取り除いてから定植する。
 - 3 多肥栽培を避け、適切な肥培管理を行う。
 - 4 発生ほ場では、早期出荷を心がける。
 - 5 発病株は畑から持ち去り、処分する。
- ※7～10月の気温が低く、11～12月の降水量が多い年に多発する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 土壌消毒を行う([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。
- 2 セル成形育苗トレイまたはペーパーポット苗の場合は、育苗期に薬剤をかん注する。大苗の場合は、定植直前に薬剤に浸漬する。
- 3 土寄せ時に薬剤を株元によくかかるように散布する。

白絹病

(耕種的・物理的防除)

- 1 発病ほ場には連作しない。
- 2 発病株は抜き取り、ほ場外の地中に深く埋める。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 土壌消毒を行う場合は、[共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照する。
- 2 発病初期あるいは土寄せ時に薬剤を処理する。

葉枯病・黄斑病

(判断、防除に関する措置)

- 1 病徴として、外葉に形成される黒斑病と類似の褐色楕円形病斑(葉枯病)と中心葉に形成される黄色斑紋病斑(黄斑病)の2種類がある。

(耕種的・物理的防除)

- 1 多肥栽培を避け、適切な肥培管理を行う。
- 2 土壌pHを下げないように管理する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#) **【葉枯病】**・**【黄斑病】**

- 1 発病初期から薬剤を7～10日おきに散布する。

べと病

(予防に関する措置)

- 1 雨よけ栽培を行う。
- 2 多発ほ場では、連作を避けネギ属以外の作物を輪作する。
- 3 ほ場の排水を良好に保つ。
- 4 風通しを良好に保つ。

※秋冬ネギでは、8月の気温が低いと発生しやすい。

※「ネギべと病なび」による発生予測や、薬剤防除の要否、散布時期の把握が可能である。

(判断、防除に関する措置)

- 1 発病株を速やかに除去し、ほ場外で適切に処分する。
- 2 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、発生初期に薬剤散布等を実施する。
- 3 「ネギべと病なび」による発生予測や、薬剤防除の要否、散布時期の把握等を活用する。

- 4 罹病組織中にできた卵胞子または菌糸が次作の伝染源となるため、作物残さを適切に処分する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発病ごく初期から、薬剤を5～7日おきに2～3回散布する。必ず展着剤を加用する。

軟腐病

(耕種的・物理的防除)

- 1 排水を良くする。
 - 2 被害株はほ場に残さないよう、早めには場外に埋める。
- ※風を伴う雨により、まん延する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 微生物殺菌剤を予防的に散布する。
- 2 発病前から薬剤を予防的に散布する。

萎縮病

(耕種的・物理的防除)

- 1 苗床、幼苗のうちから細網をかけるなどしてアブラムシの飛来と、これによる伝播を防ぐ。
 - 2 ねぎ、にんにくの近くに苗床を作らない。
 - 3 ウイルスフリー苗を用いる。
- ※株ねぎの場合、苗は健全株からとる。

(薬剤防除)

- 1 [本項のアブラムシ類の防除の項](#)を参照する。

ネギアザミウマ

- ・ [共通防除の章のアザミウマ類の防除の項](#)を参照する。

(予防に関する措置)

- 1 ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。
 - 2 露地栽培では光反射資材によるマルチによる被覆を、施設栽培では防虫ネットによる被覆及び施設周囲への光反射シートの敷設を行う。
 - 3 マルチの敷設により、土中での蛹化を防ぐ。
 - 4 施設栽培では、施設内への侵入防止のため、紫外線除去フィルムを使用する。
- ※梅雨明け後の高温乾燥期に多発する。

(判断、防除に関する措置)

- 1 粘着シート等による誘殺を行い、発生状況の早期把握に努める。
- 2 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、発生初期に薬剤散布等を実施する。
- 3 農薬を使用する場合には、同一系統の薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。
さらに、地域内で薬剤抵抗性等が確認されている薬剤の使用判断については指導機関の指示に従う。
- 4 作物残さを適切に処分する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 生物農薬は予防的に散布する。
- 2 発生が予想される場合には、薬剤を散布する。

アブラムシ類

(予防に関する措置)

- 1 ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。
- 2 育苗期間中に、防虫ネット、べたがけ資材等により被覆する。
- 3 有翅虫の飛来を防止するため、光反射資材によるマルチ若しくはシルバーテープ又は風上方向に防風垣若しくは防風ネットを設置する。
- 4 施設栽培では、施設内への侵入防止のため、紫外線除去フィルムを使用する。

(判断、防除に関する措置)

- 1 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、発生初期に薬剤散布等を実施する。
- 2 農薬を使用する場合には、同一系統の薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。さらに、地域内で薬剤抵抗性等が確認されている薬剤の使用判断については指導機関の指示に従う。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 気門封鎖剤を散布する。
- 2 発生が予想される場合には、薬剤を散布する。

シロイチモジヨトウ

(予防に関する措置)

- 1 防虫ネット等の使用により、成虫の飛来及び産卵を防ぐ。
- 2 ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。
- 3 施設栽培では、成虫の侵入防止対策として、換気窓等の施設開口部への防虫ネットによる被覆や防蛾(が)灯(黄色灯)の夜間点灯を行う。
- 4 交信かく乱剤を使用する。
- 5 施設栽培においては、栽培終了後に蒸込み処理を行う。

(判断、防除に関する措置)

- 1 中齢幼虫以降になると薬剤の防除効果が著しく低下してしまうため、卵塊や若齢幼虫が群生している葉を見つけ次第、除去する。
- 2 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、発生初期に薬剤散布等を実施する。
- 3 農薬を使用する場合には、同一系統の薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。さらに、地域内で薬剤抵抗性等が確認されている薬剤の使用判断については指導機関の指示に従う。
- 4 BT 剤を活用した防除を行う。
- 5 作物残さを適切に処分する。
- 6 常発地ではフェロモントラップを設置するなどして発生消長を確認しながら幼虫の防除を行う。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 若齢幼虫のうちに、薬剤を散布する。

タマネギバエ、タネバエ

(薬剤防除) [農薬登録情報](#) [【タマネギバエ】](#)・[【タネバエ】](#)

- 1 発生が予想される場合には、薬剤を散布する。

トビイロヒョウタンゾウムシ

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発生が予想される場合には、薬剤を散布する。

ネギコガ

(予防に関する措置)

- 1 幼虫は葉内を加害することから、防虫ネット等の活用により、葉内への潜入防止に努める。

(判断、防除に関する措置)

- 1 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、発生初期に薬剤散布等を実施する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発生が予想される場合には、薬剤を散布する。

ネギハモグリバエ

(予防に関する措置)

- 1 施設栽培では、施設開口部を防虫ネット、寒冷紗等により被覆する。
 - 2 施設栽培では、施設内への侵入防止のため、紫外線除去フィルムを使用する。
- ※従来と異なる系統のネギハモグリバエ(別系統)が県内各所において発生している。従来の系統と比べて食害が激しく、多発生すると甚大な被害となるため、予防的な防除に努める。

(判断、防除に関する措置)

- 1 粘着シート等による誘殺を行い、成虫の発生時期及び発生量の早期把握に努める。
- 2 施設栽培では、成虫の密度低下のため、粘着シート等を多数設置する。
- 3 被害葉及び作物残さは、速やかに適切に処分する。
- 4 発生予察情報、ほ場の見回り等に基づき、適期に薬剤散布等を実施する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 定植時に薬剤を施用する。
- 2 発生初期に薬剤を施用（散布）する。

ネキリムシ類

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 定植時に薬剤を施用する。
- 1 発生初期に薬剤を施用（散布）する。

ネダニ

(耕種的・物理的防除)

- 1 酸性土壌での発生が多い傾向にあるため、は種前に中和する。
- 2 植物の遺体などの腐敗物に誘引されるので、未熟の堆肥の施用を避け、病害の発生を予防する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発生が予想される場合には、薬剤を散布する。